

小松島より眺めた鴿の群泳  
中に黒く見え、白で鴿はのるゑる

## 鴿の渡來地と椿山

淺蟲附近の天然記念物

大正十四年四月

農商務省囑託 和田 于 藏

淺蟲の次驛小湊にて下車し夏泊半島に向へば有名なる鴿渡來地と椿山とを觀覽し得べし、小湊村は青森縣東津輕郡中平内村の一大邑にして上野驛より四百四十一哩四鎖、青森驛より十五哩九鎖の地點に存す、康正以來南部領となり、文錄四年津輕領となり、現在の部落は地質學上第四紀古層即ち洪積層

で容易に達し得べく、松樹の間より彼等の群を觀覽するを便とす、尙最近松島保勝會組織せられ、雷電神社の附近には白鳥館と名づくる休み茶屋一棟設けられ、來遊者の便宜を計るに至れるを以て、淺所の樂園も年と共に完備するに至れり。

淺所の樂園に渡來する鴿は、鳥學上オホハクテウ

(*Dikrornis* Esch)

なるを以て、停車場

より稍々高き所にあり、二大天然記念物の所在地たる中平内

村役場同村に存せり。

鴿の渡來地淺所

鴿渡來地は小湊驛

の東方二十三町の地

點たる中平内村字淺

所の海面にして直附

近には雷電神社(加

茂明神を祀る田村鷹將軍を祭りしと)鎮座し鴿の渡

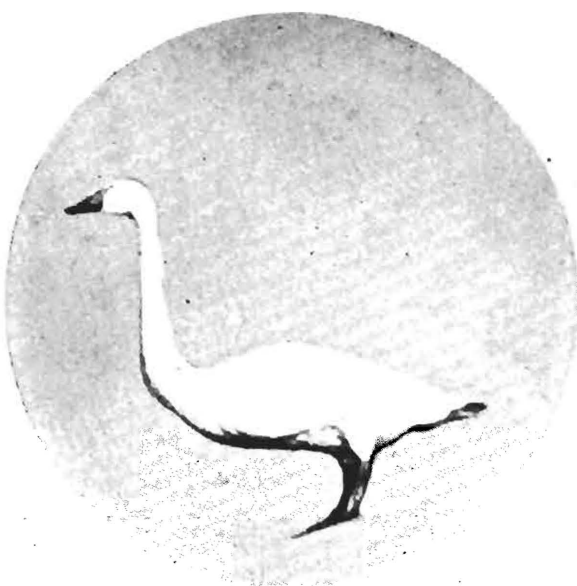
來と關係あり、鴿の來游する海面は遙か沖合迄遠淺

にして、海岸より數町の海中に小松島と稱する佳景

を有す、此の島を中心として數百の鴿群游するを以

て、其の時期には實に壯觀を極む、海岸より小松島

に至るには小丸太にて架せる小橋を渡り數分間にし



鴿

(*Olor Cygnus*) と稱するものにして、雁鴨目

(*Anseriformes*) 雁鴨科

(*Anasidae*) 鵝亞科(*Cygninae*) に屬せり。該鳥は

大形にして、頸極めて長

く、全身の羽毛雪白にし

て、翼長一尺八寸乃至二

尺一寸五分位尾長約八

寸、體長約四尺位體二重

貫内外ある、強剛にして

勇氣ある鳥なり。而して

嘴は厚大にして其の高さ

は幅に超え、嘴端漸く扁潤となり、嘴縁には齒狀物を有

し、上嘴の黄色部と黒色部とは、少しく他の鴿と趣を異

にす。即ち黄色部は上端の基部より起り鼻孔の前方に及

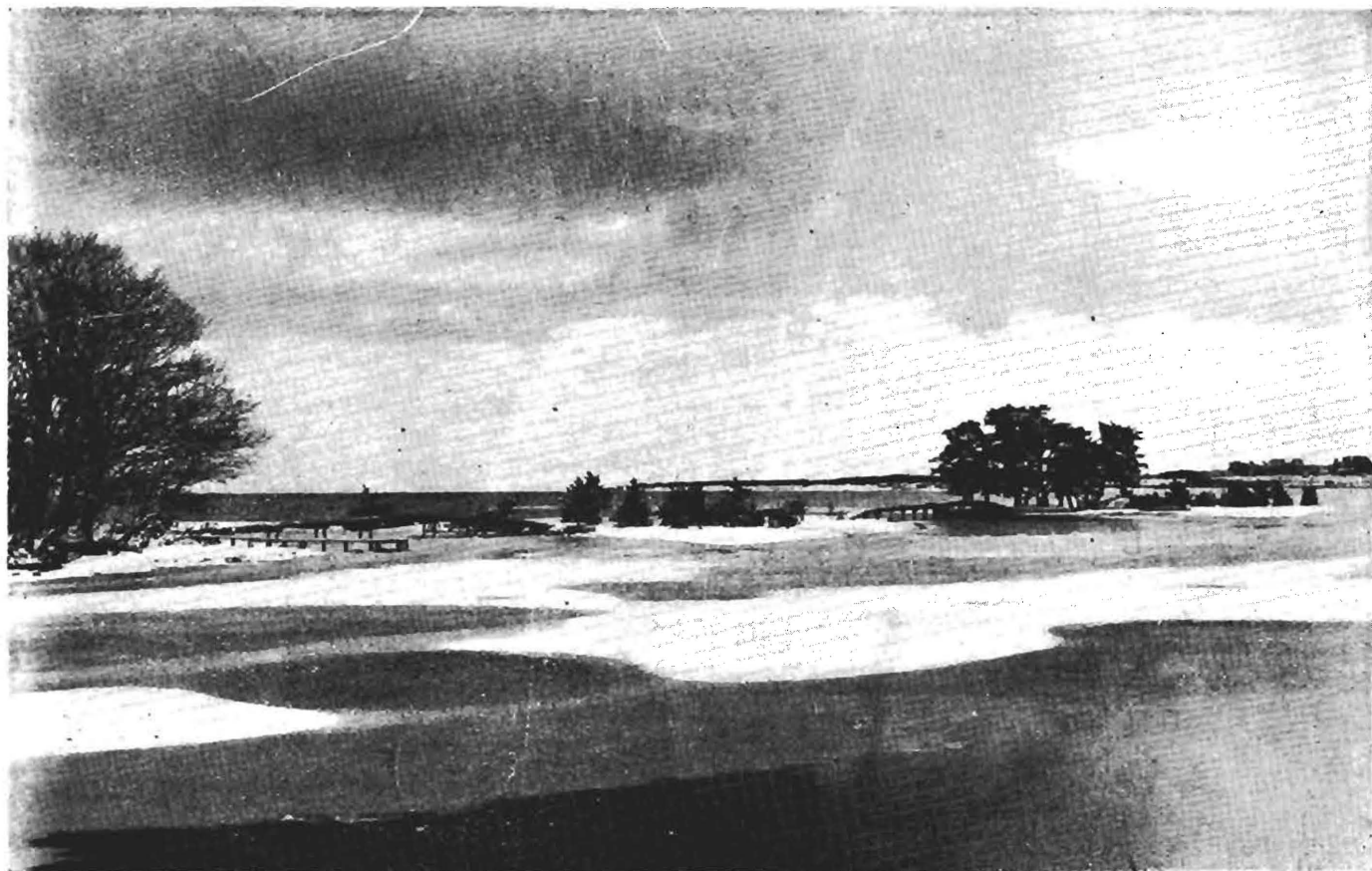
び、黒色部は唯僅かに口角に達するに過ぎず。此の鼻孔

より末端迄の長さは一寸三分乃至一寸七分に達す。又脚

は蹠と共に黒く短く、附蹠部は三寸三分乃至四寸に達

す。

す、時として羽毛灰白色（地方人は雪白色味に對して黒味勝のものと稱す）のもの、群中に散見すれども、此は幼鳥にして年を経ると共に純白の度を増加するものなり、此の鳥の壽命は頗る長く、よく百歳以上に達するものあり、又貞操極めて正しく人に馴るる性あるが故に、飼養せられて變種頗る多きに至れり。オホハクテウは例年秋季北地より同地に渡來し、越冬して翌春再北地に渡去る、冬の渡鳥にして、同地に出現する時期は、其の年の氣候により多少の差異あれど、例年十月中旬乃至下旬（大正十三年十一月二日に先着者出現）にして、又渡謝する時期は三月下旬乃至四月下旬なり、渡來出現の狀況は最初二三羽宛ギャンギャンギャンと、恰も喇叭の聲の如く啼きながら現はれ、先づ以て雷電神社の森を指して飛行し、此の森を數回巡飛したる後、小松島附近の海面に下る、此の際注目すべきは、意味ありげに必ず雷電神社に向ひて恭しく參拜するが如く、長き頸を上下に曲伸し、次に仲間同志互に相對して簡單なる挨拶を行ひ、始めて普通の游泳に移り、續いて渡來する仲間を相待するものなり。次に渡來するものも、矢張り點々出現するものにして、先づ前同様の動作をとり先着者に挨拶すると同時に、何事か道中の狀況を物語るが如き態度を示し居るも仲々面白し。斯くて日を増す毎に其數加はり、間もなく、松島樂園も



淺所の鵠渡來地に於ける松嶋の冬景

數百の白鳥を以て包まるるに至り、極めて平和なる鳴聲は靜かに澄み渡りし月明の夜には十八九町を距りたる小湊の部落に迄聞ゆるに至る、鵠群の最も盛に現はるる時期は、例年十二月より二月に至る間にして、其の多きときは一千以上の群を見ることあり、群列は極めて奇觀にして、浪靜かなる蒼海に白鵠縦列となり、中には點々幼鳥の黒煤色を呈するありて、一舉一動皆よく一羽の先導者に従ふものなり、天候の如何により淺所の海岸近く來游することあり、又遙か遠きかりて認め難きことあり、概して山背の風吹く日には附近の海面に散在し、風るに従ひ再出現し、暴風雨の來襲をよく知り、其の前兆として極めて岸近く寄集し、大に噪ぎ不穩の狀態を呈するが故に、漁夫は之を見て出漁の行事を定むと云ふ。オホハクテウの食餌は、地方竝に時季により各一定せざれども、淺所に於ては多くは海藻なるを知るべし、又よく觀察する時は、ハマグリ、アサリ及び其の他の貝類種々の甲殻類、昆蟲類、蠕蟲類、小魚類等の動物質及び植物質のものたるを知るべし、海藻の主なるものは同地附近の方言ソウナ和名スギモク學名 *Cocco-plora Yagshishi* Okm と稱するものにして、海藻學上有名なる植物なり、而して此等の食餌を漁るには彼等の習性上潜水すること不可能なるを以て、長き頸を砂泥中に挿込み之を採りて喰するもの

なれども、多くは漁れる食物を直ちに嚙下すことなく、之を咬へて種々の調理をする如くにして後嚙下するものなり、又面白きはハマグリのような貝類を喰する動作にして、先づ砂泥中より採れる貝は直ちに喰せむとすれども堅く閉殻するを以て、之を容易に破壊すること能はず、されば、玆に一種の奇習を發揮して開殻せしめて内部の肉を摘喰するものにして、實に驚くべきものと謂ふべし。即ち苦心して漁れる貝をば咬へて自己の左翼腋窩に完全に挿入し置き、之を體温にて暖め所謂蒸熱するが如き装置をなすときは、堅く閉ぢたる貝も温度高きために遂に開殻するに至るべし、此の際開殻運動により腋の下面部を刺戟するものなるが故に、夫れに反應して開殻の熟度を知り、長き頸を腋下に伸入して貯貝を取り、始めて内部より肉を取り出して嚙下するものなり、されば、游泳中之を追廻すも容易に飛び立つことなく、唯唯遊び廻りて腋下の貯貝を落さざらんと努むるものなり。此の事實は同地方の漁夫たちが以前より認め居る所にして、其の眞偽は實地觀察の結果愈々確實なることを知るに至れり、而して突然或障害身に迫まりて飛び立つときは、止むを得ずして貯貝を腋下より點々落し行くことも見受くることあり。該鳥の貝類を漁る時刻は晝夜通じて行はるるものなれど、就中夕刻より夜明に亘りて旺なるものなり、日後は



景 冬 の 社 神 電 雷

人類の通行を見ざるを以て、次第に淺瀬に推移して貝類を漁り、時には雷電神社の橋下に迄寄ることあれども、夜明より次第に岸を遠ざかるを以て何等斯かる漁りは認め難く、唯游泳するを認め得るのみなり。又海藻の何種を喰するかを研究せし際も、嘴に咬へながら三十分前後追廻され、漸く之を遺棄せしことあり、此の點より漁業上の損害は數ヶ月に亘り數百の群に喙まる、が故に、決して尠からざるべし。斯く有要水族を喰するが故に、有害なりとは知れども、村人は敢て咎むることなく、皆雷電神社の使姫と信仰し、昔時は舊藩にて年々該鳥餌料として若干の粃種子を給與したりと云ふ。又近きは農商務省にても愛護の目的を以て粃を海面上に散布し、或は彼等の嗜好するセリの如き野菜を給與するに至れるを以て、彼等の慰安は年と共に加はり、人類に馴れ親しむに近づきたり、元來平内附近の村民は該鳥を神と崇め唯一人となし、捕獲するものなく、會々他より入り來れる獵子のために打たれて負傷するものを發見するときは、村民舉つて之が救護に従事し、不幸にして斃れることあるときは、神式の葬儀を行ひて雷電神社の境内に埋葬する等のことは、假令迷信とは云ふものの、生物愛護の範とすべきなり。斯く村人の保護する外に該鳥の嫌ふ銃聲を防ぐため、銃獵禁止區域を設定し、更に禁獵區と定め行政的に保護した

りしたが、尙其の後大正十一年三月八日  
内務省告示第四十九號を以て、史蹟名勝  
天然記念物保存法により、天然記念物と  
して右鵜渡來地を永久に保存せらるるに  
至れり。

完全なる保護の下に、淺所の樂園にて  
日を送る鵜も、變遷する季節の刺激に反  
應し、軀て寒明けの二月の頃よりは點々  
此の塘を放れ去り、散々附近の各地に漂  
行するに至るを以て、獵子のために捕獲  
せらるる數も決して尠からざるべきも、  
保護區域外に出でたる獵鳥のこと故、止  
むを得ざるとす、北の際諸所にて負傷  
せるものは成るべく淺所に逃れて健全と  
なり、四月上旬に他の群中に遇れて立去  
るものなり。渡去の状況は特別に注目す  
べき點もなく、何時となしに三月頃より  
小群となり、三月下旬には少數を見得る  
に至り、四月上旬に至りて殆んど其の影  
沒するに至る。

淺所の樂園を立去りし後は何處に行く  
べきかは、此の村人も疑惑とする所なる  
も、遠き海山を越えて北地の故郷に至る  
ものなり、即ち夏は北緯五十五度の英國  
邊より同五十六度のアイスランド乃至同  
七十度の歐洲北極地方にて蕃殖するもの  
にして、淺所より見えては鵜は夏の松島も  
知らずと云ひ得べし。北地に趣く目的は  
云ふ迄も無く蕃殖の計營に外ならずし  
て、蕃殖期には大なる沼地に於て一番宛  
となり、大巢を築き四五月頃淡黄白色な



景 全 山 椿

る大卵四乃至六個（稀に七個）を産み  
て、鵜卵孵化育雛するものなり。卵の大  
きさはドレッサー（Dresser）氏に據れ  
ば、約長徑四、六吋短徑二、八七吋なり  
と云ひ、又ノーマン（Naumann）氏に據  
れば、長徑の最長一二、五吋最短一一  
〇耗短徑の最長七四、四耗最短七二、七  
耗にして、重量は三三、五乃至四一、五  
瓦ありと云ふ。

（冬は地中海、中部亞細亞、支那、日本  
等に渡來するものにして、我國にては北  
緯三十二度四十八分東經百二十九度七分  
の長崎に達すれども、青森縣以南の地方  
には何れも少數にして、長崎の如きは嘗  
て見たることあるに過ぎざる程なり。尙  
最南端地方としては北緯二十五度の印度  
邊にして、之又嘗て一度捕獲されたりと  
云ふに過ぎず、されば淺所の鵜は蕃殖地  
たる北地は彼等の故郷にして、我國は越  
各地たるに過ぎずと云ふべし。而して特  
に選んで淺所に渡來するは外ならずし  
て、同地の環境はよく彼等の自己保存に  
恰適せるがためなるべく、決して數百年  
前の昔時に渡來し初めたるにあらずし  
て、遙か數千年以前の時代既に渡來し居  
たるものの如く想像する所なり。

淺所樂園に於ける鵜群從來の状況は記  
録によりても明かなる如く、平内地方に  
ては鵜を以て雷電神宮の使姫として之を  
捕殺する者なかりしが爲、自ら人に馴れ  
親しみ秋季には無慮數千羽の群を見る



や、里に近寄り田園に遊び落穂を拾ひ、小供等の之を見るときは恰も飼鳥の如く、子供等と親しみ戯れ何等人を恐るゝるゝとなかりしが、十數年此の方銃獵盛となるに伴れ、渡來の數頗に減じ、到底昔日の比にあらざるに至れり、茲に於て、前記の方法にて直接間接に保護を加ふるも年と共に減少するが故に、疑もなく生存競争の原理に支配せられつつあるものなるべし、されど大正十四年一月上旬には近代に稀なる大群を見るに至り、其數優に一千二百以上に達せるを以て、附近より日曜を利用して見物する者頗る雜踏し、白鳥（オビロ）も大繁昌を呈したりと云ふも、一は氣候の影響と一は保護制度の効果を呈せしなるべし。

鵝見物には双眼鏡を用意するを便とす、是他なし濫りに小舟を漕ぎて彼等の群集に接近せむとするときは、之を恐れて遙か沖合に遠ざかり却て彼等に不安の念を抱かしむるのみならず、一般の觀覽者に迷惑をかくること多きが故注意すべきなり。實際一度追廻されて遠所に退くときは再樂園に入るに二三時間を要するものなり、双眼鏡にて望むときは彼等の生活狀況を廓大して觀察し得べく、且遠く上北下北兩郡の連山及び平原を背景とせる景色をも視得て一段の趣味あり。

### 全山椿の木 のみの椿山



椿 山 の 林 相

椿山は淺所の鵝渡來地より約三里の地點にあれども、等しく東平内村部内にして、大字東田澤字横峯なる所にあり。同地は夏泊半島の北端野邊地灣の西北海岸に臨める山地にして、東田澤村より約十町あり、安全なる順路としては淺蟲驛より小湊驛に下車し、徒歩にて淺所に至り、次で海岸に沿うて行くものなれども、若し淺蟲より汽船を賃して航すれば、二時間餘にして到るべし、此の際には湯の島、裸島、鷗島及び茂浦島養場ありて青狐の飼養盛なりを望み、更に北航すれば二子島及び大島をも眺むべし、風景實に絶佳なりとす。尙淺蟲より徒歩にて半島の西海岸を迂廻するときは、所々の絶景を眺望し得

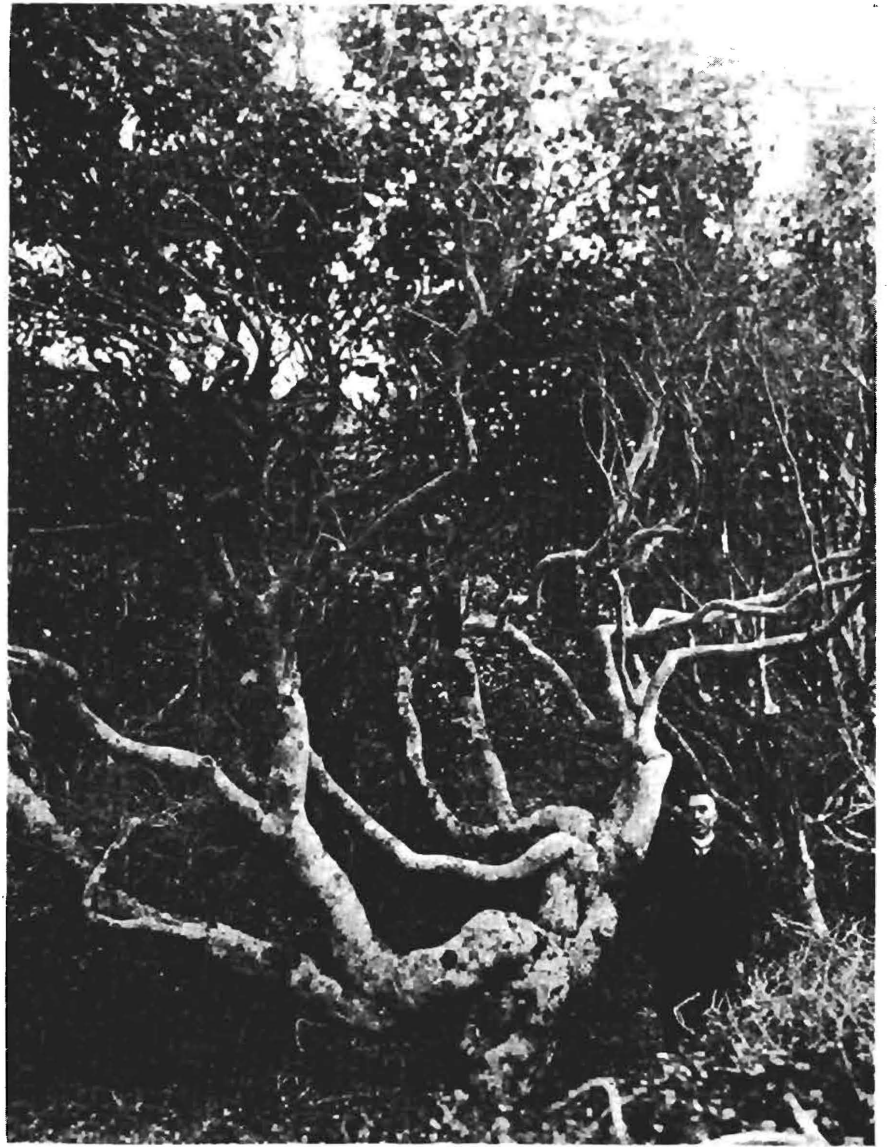
べしと雖も、峻峻なる里程五里に餘るを以て、普通の旅装にては困難なりとす。椿山の總面積は約二十町歩にして、東方海に臨み海面上一三四十尺乃至二百尺位の丘陵をなす。満山幾千株のヤマツバキを以て蔽はれ、境域廣潤にして綠草滴り砂白く、一條の椿川と稱する清流紆餘綫々として其の中を貫き、西北部に屬する小高き一角には、猿田彦命を祠れる椿神社（元祿十一年四月三日建設）の小祠鎮座し、鬱蒼たるヤマツバキの老樹に被はる。又附近の海岸には雅致ある松樹長枝を垂れて相連り、仙境の佳風は以て俗心を洗ふに足る、而して四月下旬及至五月上旬の満開時には、望

上より遠望すれば山茶花の紅炎を以て包まれたるが如く翠綠を配す、即ち蒼海を抱き紅山を負ひ、満山悉く花にして其の形容は唯々紅花海水を焦すと稱するに過ぎざるべし。されば古來幾多の名士によりて、或は文學的に或は植物學的に考證せられたるものも、決して尠からずとす、椿山のツバキはヤマツバキ（山茶、蔓陀羅、一捻紅、千葉紅、石榴茶）即ち *Thea Japonica* と稱するものにして山茶科（*Theaceae*）に屬する日本特産の常綠喬木にして、北海道には産せざるも、本州より四國九州琉球等に亘りて生ずるものなり。薩摩伊豆七島には極めて繁茂すれども、北部に

## 報 書 育 教

至るに従ひ漸次稀少となり、磐城海岸の天然林を除きては殆んど注目すべきものなく、唯秋田縣男鹿半島（小面積）及び陸奥の棒山に於て大に認むべきものなり。されば棒山こそ該樹分布上明かに最北限を表示するのみならず、北緯四十一度東經百四十度五十四分の地帯に於て、而も廣大なる地域を領して自生繁茂する點は、實に學界に誇とする所なり、茲に於て、内務省は史蹟名勝天然記念物保存法に依り、大正十一年十月十日附同省告示第二七〇號を以て、天然記念物として保存方を指定するに至れり。

棒山東南部の山腹は全然ツバキの單純林にして、密生せる樹冠は遮風のため内方に圍ひ、恰も刈り揃へたるが如き觀を呈す。又棒山の西北部に當る丘陵は、前者の如く密生せずして數種の樹木と混生するを見るべし。同山のツバキは場所によりて大きさを異にすれども、概して風壓の影響によりて丈高からず、殊に海岸に接近するものは最も低く、僅か五六尺に充たざるものあり、されど谷間に生ぜざるものはよく三四十尺に達するものも尠からず。又其太さに就ては木に比し太く地上五尺の部分にて三四尺に達するもの多く、稀には地上二尺の部分にて五尺一寸五分に達する珍樹もあり、花色は深紅薄紅の二種を認め得べく、後者の系統は其の樹數尠なく、花形は



棒山中第一太き地土二尺の所五尺二寸あり。樹下はるては山一海氏

一般に小さく、海岸に接近せるもの程小形にして、老樹のものに亞げり、而して其の大形のものにありては、花の直徑二寸五分位なれども、小形のものにありては一寸徑も有せり。花瓣數は五瓣を普通とすれども、六乃至七瓣のものも少からずして、一花瓣の長さは一寸八分位に達す。如斯美觀を呈する天然記念物も現在に於ては、樹木既に老齡に達し、漸次小形の花を開くに至りしは止むを得ざる自然現象なりとす。されば樹木の攀折は勿論、幼樹の拔堀を嚴禁し、一方之を培養し種子を採集して蕃殖に努むるときは、永久に保存することを得べし。

往昔、越前の賣人横峯嘉平なるもの、田澤村の玉女と

契り情交甚だ濃なりしが、一日嘉平故郷に歸らんと欲する際、玉女の悲歎寢食を忘れて再航の日を約す、又來む年には棒の油を土産に頼みしに、嘉平快諾して故郷に歸る、其の後玉女毎夕海濱に出でて唯蒼海を望みて痛哭せり、翌年、海路遙かに田澤に歸れば、意中の人既に病みて此の世を去り、一基の墓石殘るのみ、嘉平斷腸の念禁する能はず、涙を揮つて其の墓畔に兩三株の棒を植えて其の塵魂を慰めたり、僅か兩三株の棒は今や全山に繁殖して赤瑾梢に盈つるもまた所以なきにあらずと云ふ。

以上述べ來りし淺蟲、淺所、東田澤等にある名勝附近には、古來禽獸の蕃息すること夥しく、年と共に獵者の集ること多を加ふるに至りしがため、近海並に山野に銃聲の響くこと多く、一般鳥獸は其の數を減じ、殊に淺所樂園の鴿は渡來すること逐年少數となりたるを以て、農商務省は有用鳥獸蕃殖保護を目的として、大々的に淺蟲附近より夏泊半島に亘れる極めて廣汎な禁獵區を設定せり、即ち大正十年三月二十八日より東津輕郡東平内村、西平内村、野内村及び上北郡野邊地町に通ずる國道以北海岸朔望滿潮線より六百間以内の海面を、大正二十年三月二十七日迄滿十年間禁獵區と設定せり。されば、上記の名勝は悉く禁獵區域にあるを以て、銃獵すること能はざるなり、従つてキジ及びヤマドリ等の類を始めとし、野兔、栗鼠等も著しく蕃殖するに至り、一方有益小禽類も諸所に營巢するもの多く、加之大正十三年以來小湊より淺所に至る其の途中雜木林中には鳥の集箱を給與し其増殖を企圖しつつあり。淺所の海面には鴿の外數萬の鴨類群集し、毫も人を恐るることなく岸近くのみ推移し、狩獵家をして羨望禁せざらしむる所なり。（完）